里見八犬傳　第七輯　巻之壹

へ13
709
32

曲亭馬琴著

# 八犬傳

東京名山閣版

第七輯

明治二十六年十月九日購求
遠13 歸709 巻32

## 八犬傳第七輯有序

家枉神
今國東

世有奇才。然後奇書出焉。有奇書。然後奇評附焉。朱元晦曰。好人難得。好書難得。非但好人好書之難得。好評亦不易得。何者。人之好惡不一。加之學之深淺。才之優劣。各有用捨焉。是故所讀書同。而其所取不同。譬若彼金聖歎水滸傳評。讀者駭嘆稱妙。以余觀之。未可盡為妙也。聖歎尚如此。而況其他乎。近見好奇之士。評稗史徒搜索其瑕疵。批之以理義。便是圓器方蓋。更


歸家堂藏

鮮有不損作者面目或聞余言嘲之曰稗說脞記無用之冗籍費工災櫻安足道哉嗚呼憎無用者不知用之所以爲用也人之一身無貴無賤所起臥不過一席然多席爲無用之物廢之可乎無用者有用之資也余不貴虛文所好乃經籍史傳舊記實錄已矣而每歲所著莫非稗史小說所以然者何也書賈揣利以求於余余欲著之書書賈不願刻既已著無益恁地書也三十有八年于茲潤筆以購有用之書則用之與無用不可得而分別也宜乎大聲不入里耳稗史雖無益於叟而寓以勸懲則令讀之於婦幼可無害矣且也鬻之者與書畫剞劂刷印製本諸工咸以衣食於此抑不亦泰平餘澤耶乃者八犬傳復續稿迨于第七輯每輯有自序讀者罕矣又唯述愚衷於端楮爲知音鮮頤

文政十年丁亥冬十一月之吉

曲亭主人撰

八犬傳七輯卷一　二　涌泉堂藏

# 南總里見八犬傳第七輯揔目録

## 卷之一


○第六十二回
船蟲姦計說禮度　現八遠謀赴赤岛

○第六十三回
携短刀來緣連訪師家　與衆兇挑信道顯武藝

○第六十四回
現八單身與衆惡戰　緣連牙二郎逐信道

○第六十五回
逼媳一角求胎　劈腹雛衣仆讐

○第六十六回
斬妖邪禮度雪父怨　丐毒婦緣連歸白井

○第六十七回
禮度義捨家禄　船蟲謀脫縲絏


## 卷之二

## 卷之三

## 卷之四


○第六十八回
穴山枯野村長救秋實　猿石旅宿濱路誘濱路

○第六十九回
謨仕官木工作豪留信乃　薦給事奈四郎擊四六城

○第七十回
指月院女姦丈伴淫婦　雜庫中眼代捕戍孝

○第七十一回


## 卷之五


○第七十二回
撿寃死堯元知姦　寓禪院舊識再會


## 卷六


○第七十三回
三士一僧敬五君　信乃道笻即謁甲主


## 卷七


謬仇奈四郎喪頭顱　留客次團太誇鬪牛


南總里見八犬傳第七輯揔目録終

武田信昌

一念所興
四知應怕

雲とのゝ見えて安
やまんはゝ〻ぬ
まけゝる山乃
かひをありけり

甘利兵衛
尭元元

奴隷
幇内



濱路

濱路

憾然相照鏡中
亦有與吾同憂
牡鹿鳴く磯山
ちのみ小萩ちり
おのゝ友とやなひ
かゝむ

由来汝之紅手拭
勝似妖狐戴髑髏
子をおりふ後の姿より
かりかりの素良ふかの乃
縫子猫の髑
赤岩
牙二郎
假一角
赤岩武遠

淫婦
夏引
一妻両夫
黒白云判
泡雪奈四郎
秋實
四六城木工作

涌泉堂藏

神田古物

冰輪冷艶擅清光銀漢斜添雁一行船倚枯葭櫻樹岸人悉榮利宿鵞傍蛩壓哭子狂何甚在五恩京諷詠芳月色今霄千古似秋寒徹水覚風霜　九月十三夜墨水賞月所事

玉照堂主人



南總里見八犬傳第七輯卷之一

東都　曲亭主人編次

第六上面

船虫奸計禮度を説く
現八遠謀赤岩に赴く

交遊の厚薄只その損益二友にあり。こをもそ。その志悃ざるべし。肝膽も猶胡越のごとく。その志同じきに千里といふも合璧に似たり。紹前齣再説犬飼現八信道が下野州安蘇郡返璧の白屋に世を遁れたる一才子犬村角太郎礼度と膝を交へ肝膽を吐き。文を論じ武を講じたる主客の清談時移るを覚ぼえず。奥に入る折から。亦復たへ来る客あり。奴隷使の呼門高く。郎君と呼べる狀。赤岩よりあらん母公の詣来たるを。現八即今いまや是首へとひ。ひき。又外面へ走去りけり。登時犬村角太郎。現八よりも對ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。母に訪ひ。ハ

何事やらん綽のあるを沼くこそ紙門のあるこそ避ぬるぞや。然とそもうちまぐるべき且く横臥をうとのふ現ハ領きそこそいろいろてふ。そくとひこそて刀を食つ行嚢さひちふそく引提くそや次の間へ退けば角太郎もまを被て。紙口をやをら閉ようり。有如之程ふ船虫ハ。轎子を立出く途よりも相伴る媒人氷六ふ共伝ふ後方ふ立せ十字竹輿を草の庭へ舁入さそ。誘とだるふ縁頬よりふ来立くうち登まで角太郎ハ遠く。裡面より障子を推開く。こそ氷六ふけざるの兒母御前よくこそ来ま〳〵れ。氷六嗽もこるさへと誘ふ辭他事もそ。そが伝立こ迎まで船虫ハ莞然ふもや上坐ふ著く程よ氷六を謙遜りて地爐の遐ふ坐を占るを。角太郎ハふ請登〳〵く。茶を薦めるぞ〳〵る。官待態ふ船虫ハ半ひらき〳〵扇の風を胷のあるふ戦ぶ〳〵く。要時あちこち見廻ふ畳む扇を側ふ措く。膝を進めく喃角太世ふそ秋ふ央を過く。朝々を最大う。

身ふ入む風の厭〳〵ふ恙もあるく歡び伝り。今さらふ改めくいふ要るこそとなぶ〳〵初ハ些の錯悞ゆく。親子ロ舌の起ちより果ハ終まく釋るこそ。妹と仗のこ狄爹々公ふもら斯引別まく居ぬ。ハ安否を問ふよりもかく。胷苦ふこそをるぞ知らぬ世間男姑の言伝るく。あの鬼々〳〵こそ継母ぶ。不刃心出せ〳〵ぶどいふる慎まこ役ハ吾併ふ伝り。とのふふ角太郎嗟嘆〳〵。そ宜ハまるとこぶら。親子の間ハ髪ぶも容まず只是天性ふるのを。身不肖ふ〳〵ふ〳〵く親ふ愛を失ひ。不孝の罪の怕〳〵且悲〳〵ふ勝ぶこそ只顧道世の願ひあを。垂箒てのこ必ども然りとそ親のうふ〳〵も一日隻時ふ忘るる間ふ〳〵くうち歎ぶく。ひひ〳〵ふ〳〵ぶ〳〵ら安否をたゝせんとそ狄綽逆さふ訪来ま〳〵ハ有こそふ〳〵で森。時ふく氣候も順まこふ家尊の大人ハ腰痛の持病の發りあるぞや。と問ふ船虫微笑く否。持病ハ没りあるもど。昨宵初心の弟子達ふ巻藁を射さ



東京堂蔵

つ。背後に立て。左せよかし。右せよかしと誨へつ。その折のなりぞとよ。初学の癖
なれバ腕狂ふて巻藁の柱へ射つる箭の飛それて。やゝ大人が左の眼を太く傷
らせし事ありぬと告るに駭く角太郎ハ安からぬ事にぞ。痍の浅深いかにぞと急く
問へば。さればとよ背鉄くまではあらねども亦浅痍にあらず。素より悍き大人なれバ
まづからその箭を抜捨て。痍を洗ひ薬を布て。今朝まで吾儕にだに知らせ給はず
起臥なほ常の如くなれども。立働きの心に愜はねバ。曲彔に身を倚給ふ。
訪来る人に四表八表をうち相譚せ給ふ気色なく。みづから慰めさせ給ふのみにて面色
さへに生平ならぬ苦痛さぞと推量まゐらせ候へども。患人よりもなほ側病する吾儕が苦しさ。
医師も既に三人まで招きぬれど即功なし。かゝるときは神仏の利益を祈るに優る
ものなしと思へバ郷の宿所を出て。日出の神社へ詣る程に犬村川の下にて氷六
叟よと呼かけられて猛にさへあれバ投弥客を伴ひてこよより下へやよ叟よ。

ともかくも年寄甲斐に續く大夫婿がね映ゆる人とて吻々とうち笑へバ氷六も
やゝ進出て。喃犬村の郎君。赤岩大人の刺傷ハ片眼を喪ひ給ふのみ命めで
たく。されどもかしこのみ苦労ならせ給ふにぞ。其にもやゝく若よからぬハねる
ろ。比よ主頭まゐる雛衣とのさへ。いかにぞや諌めても涙の乾く隙なし。
然ばこそ又日ごろ女中を旧の宿所へかへしなされしが。その事ぞめでたかるべしとは思へども
走り出て巷路躱させまゐらするに困じ果てど老丈婦が張番して暇乞すれバ
けもなく抜出て何の程にかあらぬかくならねバ措まゐらせ追留んと彼此索ぬる
程に犬村川なる柴榑橋より身を投んとせられしを遮りて後方より走り着
て抱き禁めて将て帰さんとしつれども既に必死を究めて放ちまさと身を捩れて
留るべくもわらざりけり。折から赤岩なる母御前の日出詣のかへるさに輿子帛て
件の橋に近つき給ふを呼よせて加勢に憑みまゐらせ。左右なく諌まゐらせ。

拯治ますを商量せしが。かゝくせんやと宣しを。ちからに同道致しつれど。只船虫語を
續て。喃角太とのに向ひてもいはしるゝが。生さぬ親とて悪梶ぞと。いふなる五倍を世の
人によく知れたる所にもあらねど只痛しい雛衣は飽も飽まで世ねば中を些の言
語の錯誤より。去られて久しく媒人許かゝる歎きに身を措かね死なんと思ひ訣め
る心の中を知らば汲みて。犬村川もなほ浅し。雲妻時共音に泣にいでてなにゝ
なきむやとぞ。十字竹輿にうち乗して。路いそがしく将て来つるに。五倍がおん身に手
土産なよ。やゝ心に入ずともやよ何事も宜しき好も万も五倍に頼て受納めて。只
らが。爺々公の機嫌のよき折に勧解る方便は。いくらもあらん枉て兼引給ひね。と他事
なく諭せし善心実意は。表皮なるの空情とは思はねど。角太郎はうち驚きて。貌を
改めて今になりぬねとなりば。大くさくありねおん慈愛は彼のみにて。我某さへに再び
幸ひありしかども。親に禀る勘當を免されずして離別の妻とひとつにならんは。ころ

ゆるせと推辞を。船虫貸ましぬ。如右おもへるは無理ならねども。吾夫が宿ふよしと異なる病痾
平愈の加持祈禱も。慈悲善根に優ものあらじ。けふもそらしも雛衣が必死を途に
拯ふともおん身とひとつに世で措ならば。又只勤労を倍まするのみ。價作て魂を容ぎと
いふもえ世話に似て。真の功徳にあらず。必死を拯ふそ。そがうへに情願を遂させし
などこそ。真の陰徳慈悲善その善報ひの何処へ遣くべきと。功徳をのみ爺々公の
病のやうやく痊りぬれば。始終はおん身の孝行の空しからず。とはまくのみ。これらの道
理をしらずは。親に違衝く子に手を下て。潜びさしてへ訪も来しや。況くや舅姑にも
よくも當らぬ離縁の媳を。おん身に勧解て復せと云得しそのよしなる情由あるをいはゞ
適々爺々公の為。おん身の為をしらべ。かくても否と欲辞ひ給ふ。欲みづから尋思をおもひ
ねと説諭さるゝ。角太郎は有死の答に當惑の胸安からねば。頭を低てなにとなくも
なりけり。登時媒人氷六は。髀を鳴らして感嘆の声も調子をあげて。叶拵明なる

女中ぞかし。日比は烈しくて五分でも透ぬ性なれども。かくまで善にも強かりし。愚魯なりける俺們すら。呑了る意見の妙薬経験は信と見えたるにやよ郎君いかにぞや。さらずも来らじやと。急しく勧め諭さるゝ。角太郎は叉手ながら容を釋き。ならく頭を擡て。親にも他にも我甲となて。庖會を被奉るこの身の不肖を恥らし。親の勘當免されずして。雛衣を召復させんは本意に背く所行なれども。父上将大人の病平愈の為とし教諭させ給ふが遂に脱るゝ方もなし。孝子は已を空しうするとき親の為にせざるものもなしとこそ聞くものなるを。この事後に大人に告なば。とも大人の金瘡痊ずとも歎きの中の驩びぞ親の為には死をだも辞せず。況て夫婦の間にて。些の理義に違ふをもや左も右も許させ給へといふに船虫歓びて叔へ納得なしし上は早に商量整ひぬ。かゞなる愛くるゝ悦びなるべし。喃阿氷人雛衣をとてとくところへ呼ぬるぞやといふに氷六ともゝ貞に笑つゝ縁頬に立出て。その竹輿とてへと



呼寄すれば轎夫們がこゝろ得て。擡起しつ。縁頬の框へ駘て横著の筵簾を叉脚ほどに誘ふれば。又と氷六が扶出せど力なき憂苦に窶れし雨中の花弥生の後の雛衣は浮世の秋の韓錦。餘ぬ絳地の所天の宿にて。ふたゝび地の歎しさも袖はまだ乾ぬ濡衣を解んよしもがなたなきぬ憂身はいとゞ面目も。又今さらに泣良乃。残の雪の白粉眼包はすでにの落合坐席扶披まして姑の背後のかたへに坐しぬれども。頷つく随に擡得ぬ頭病しく重げなる。船虫さてこそと見えて久々にて喃雛衣是首と彼首と遠かねが角太郎に説勧めたる縡の趣の伝えけりげより故の妹使川山迹なりしぞも睦し心六田の里に類りて口舌の塵技擱流も風波は稍おさまりしをかん身は娯なう恐ぞや今しも何を憚りて逡巡をするところぞある。こなたへ進みなへねといはれて身を含けり引著て已が側に坐らしむれば雛衣繞に頭を挙て鈍く綻ぬ言語ぬ答ふのみなり。盡し得ぬ心は慈愛は須弥よりも高きを氷六ねもその月ごろ大く劬労を

角太郎
永六

返璧の奄
小舩虫
禍胎を贈
伝

被給りし時の不祥にはあれども、親切の甲斐ありて絶なんとせし玉の緒も、妹背の縁しも末長かれと再結び留られし、恩義に何を報ふべき、身の幸ひに就ても又面なく侍りとて、うち掩ふ袖に涙を拭ふのみ。有繋に恥て良人にはまだ何とも得いはねども、維摩の室に毘耶の城はあらねども、弥まして懐ひとつに籠めたる氷六二足を慰めなく事あると死にし仏の足を戴くは、これ人情ならず。然る時には香ども焼ぬがなるべく浮世の人情なれば、口舌起さで引出さるるも、皆な氷人の役なるを、恩に被べきにもあらねど、暁比の望の月かくまで圓く納りそは宣なり、千秋萬歳楽千箇の玉の千曳の石の重荷を十々卸しつ。やよ郎君、御深慮を受とりて、信と遽与しおうせしぞや。いはるる比より預り置たる三行半の休書さへ、又故にならしついくく愛でし懐に、こそいと懐紙の間を撈捜りとり出て、恭しく推披きつ。やよ郎君、斉せかかる物は片時も身に添措んはいと忌はし。兪立合せある折、今面りに夏虫せん二三ツにくだきと推

操て、地炕の中へ投棄れば、焱と燃立灰埃を、船虫は扇のそのまま遣りつつ微笑て、喃角太郎、なまじいにても果しなき争ひするより、只念仏三昧うち措て、朝夕夫婦睦しく、爺々公の勘當免されて日を僂て俟ねかし。吾儕が系を引して繰り損ふのあらねども、雛衣も如右とてなるて、不覚なるもまた一年三百六十日口を開きて笑ふ日はいくばくもなかりけり。親子夫婦の間でもいと美しきものはなからんや。有身とはや月も岩田帯、食物をも起臥につけても人よりに心を用ひて、平けく安けく産出しなんてこそ今よりぞ祈り侍るかし。気懼りの関の白の半開きなるよしあれば、音耗せざる易からぞ。対面にいよいよ難かり其もまたさの程なるべきに、みづから愛しなめりと慰らるて、角太郎も雛衣も感涙の落るを覚ず、額つき柔て、かたじけなくし、御洪恩なりとのうへ、家尊の大人のおん怒を和げなくて、恩免めでたく見参のおん汲引を願ふのみといふに、船虫領きて、それ又なるべくやさしくも

る。五吾侍ふ女子のめるべ兒欲噛阿氷入紫む時も程りくう誘退らとゑらそ。
立ちくまるを氷六ま遠ーく推禁めく且俟更従者達の漫行をーくわらんと。
いひつ外面ゑ出ゑく人々ハ其処ゆ在る赤岩殿の奥ざゑの還らせゑふ轎子をもく
些方くまぞやと喚る声ふ轎夫ハ応と答く彼此ようゑ伸ーく起てゑう撞て
寄せる轎子を要妻時俟せる船虫ハ浄あ未果て立出ゑび雛衣ゑ得く。
含れる柄杓の懸水も落ゑび石の苔衣老母草の珠ふ黄櫨丹巣夕陽目映く
めら引東ふわらぬ西面潜びく北を恩めく。縁頬よりぞ乗る轎子をみんゑ見
送る客態ふ少許後れく立ち氷六ゑ花さく老樹の歓びあるーく夫婦ふ辞
別寔よめぞうくとのふるう外よ他事もゑ。傭ふく来る十字竹輿ふ足取
せんと已ゑゆく後よ吊七動揺々々と出るや柴の片折戸迹を頼むと声ゑられて
杖めそよする轎夫ゑ楚と引閉く共侶よ舊来ーく路へいそぐう。さゑバ又船虫ゑ

曝ふこの地へ流浪ーく。赤岩一角武遠の婢妾とゑりて後竟ふ後妻ふゑぞ
ゑう登りくるその来歴を原るふ去ぞ歳の秋の比渠ハ武蔵の豊嶋郡阿佐谷
村よ在ーし時その夫並四郎ハ犬田小文吾を害せんとく。潜く小文吾ふ斫什れ
その刃ハ千葉の家臣ゑる畑上語路五郎よ搦捕らはく石濱の城ふ牽るく折。
千葉の奸臣馬加大記常武ゑ資ふよく辛く途ゑ逐電ーく下野州三荒山の
麓村ふ落留り且く躯ゑそ在りける程ふ赤岩一角武遠ゑ婢妾を求るとそ媒
妁せるのわーゑべ便りふ就く彼処ふ赴き一角ゑ側室よりとく。いく程もなく
後妻ふ孰立ちゑーハ船虫ゑ男ふ媚る才あるく奸智ふ長ける所以ぞう。こゑ
よりの後船虫ハ一角の家子ゑる。犬村角太郎ゑ婦を憎く讒言をのこゑと
ゑ件の夫婦を追出さーく。そゑ養家相傳の田園家財を留めく返さぞこれ
らの繹の善悪邪正ゑ犬村ゑる里人ふ大方ゑぞよく知そ恨憤るゑ三ゑりられば

皆角太郎を憐愍つて返璧なる草庵も彼里人のなかに成まるゝ又一角が二男なり
け。赤岩牙二郎と呼る悪少年が中妻密井が産るのゆゑ角太郎が為ゆゑにも
亦異母の弟なれども船虫が子のなれば孰も継母を船虫が左にも右にも
牙二郎をのゝ愛慈まく隔る心なりそうゆゑ牙二郎がその心ざしを直からず
善を疎ミ悪を好む。残忍不善の癖者なれば彼同氣が相求め同病が相憐む
とふ古語に似たるべし。有此之程に船虫が良人の矢傷平愈の為日出詣の
如るさに水六を呼けれども舊媳雛衣が入水の必死を禁ずとのゝ見て疑
候忽心に計較あるいと正首に慰めく。角太郎許誘引まつ然も言語を巧な
しく角太郎に説勸め遂に夫婦を全うする肚裏の計策の速に成まるを
歡ひく従者ホをのそかつその日晡時に赤岩なる宿所に還りく一角に
云云と角太郎がのたまへる雛衣がうへにさらに已が仮倆の趣を箇様々々と具くぞ

一角が耳を傾けく熟ぶと大ごとぞ日出の神の冥助より伜の利益が捷径
なりそのゝ甘く行まゝ目の痩が忽地愈く物を見ると左の眼の
恙なきに等しかるべし。微妙く謀りに誤ることなく下
某生復説角太郎が赤岩に帰ゆく人々の背影の見えぬるまで目送り果て
躰く母屋に退きて隔の紙戸を推ひらきく犬飼主々々大く無礼を仕りぬ誘
こゝろと詣進まゝ現ハ是莞然ゐ刀を引提進まゝ地炕の邊に對ひくぞ。
不測に夫婦再會の歡びを述ゝ角太郎が彼に大く羨こる面色にて家
音の呂律調ねば臭吉既に外に洩ぬ。實客を驚かせり。ゆ歎待といふ程に寔に
面ゆとのゝを現ハ慰めまさる宣ひそ唐山なる遐きむかしを傳へ聞く大舜の
聖人なるも弟に象あり。父母に敲曽叟夫妻あり或ハ爪をのく枯田を耕し或ハ
井に落く免まゝ只眼前の成敗のく始終の栄枯を論ずべからず既ゆく

足下の孝あり。加るに又貞烈の令政あり。久後憑心くいとのいまこそ安く角太郎が愁眉を歓めく傷を足ん。やよ雛衣こゝに進ゑと呼近つけ。犬飼ぬ。是ゑ荊婦よそいまれ目を忘りいへと引あはせまこそ現八を遽く膝を進めく云今政ゑまる狩某が下總浪人犬飼現八信道と呼るの人曩ゑ友達の仕方を索ん為當國ゑ杖を曳しよう。主人の香名世ゑ馥く景慕の懐ゑ勝ごまこそけれも柴の扉を敲きく明教を受ゝべいく捨ゝ死ぬあり。既ゑく莫逆の友垣を結びて兄弟ゑも優ま心地ゑそいでう交る年月の脩短きゑ依るべをやまこそ古語ゑも益を傾けく故が如し。白頭まで新ろうといゑるゑ只その志の合と合ぬゑ新故あり。あるでの為ゑ死をゞも辞せで心くまゝ思されよと他事をくいまこそ雛衣ゑ安う座くゑうちゑあげくいと憑き賓さるゑ呉ゑけをく訪まこそ夫婦のうくゑ幸福ヨろいと恥ゝ死るをのまゝやおん耳ゑ





觸こまこそ今ゝまら包んよりも佶らぬ。よろづゑ心つ死ゑくく。濡衣さゑ被せられ。妾のまゝ良人まら犬村の家赤岩の寓居もまらで遠離る草の莽ゑ草の床虫ゝう外ゑ友もゑ浮世の秋を身ひとつの秋狩と変べ膽向ふ心細さを忘るまでゑ慰らまこそ歓びたう。只ゑ侭の不楽住ひまく歎待とそ待ゝゑどもゝくまでも安せう。長き旅路の風雨ゑおん衣物の汚まこそんを洗濯ーく。まゝらせえ袿衣を脱せゑまべ代見出しまゝらまべ。先ゝや夕餉の准備をせゝやとゝゝつ地炉ゑまこそ寄りく柴折焼を現八まつらくと只久ゝて否措ゑ日の短きゑ昏飯こまべく程もゑ。珍饌美食ハ曾聖の誡世ゑ願ーゝ死るゑゝゝゝけまこそいまこそ五友ゑ環りもゑゑ目ゑ。夫婦のこゑも心ゑかるゑヨこそうゝとのひかこくゑまこそこゑ思ゑ衷を盡さえ狩ゑ。の継母船虫とゑを嚮ゑ某剛窺ーゑ郎オヨヌ辯の婦人こきのふ網葵の宿りゑ里人の言を伝ゝよ継子夫婦ゑ強顔こゑ

いと腹黒き絆の由とけふ始めて所以表裏ゆく儼然として慈母の以て笑の中に刃を隠し錦の囊に毒を包む言の虚実を察せずして唯一旨に迷ひ恐らく不測の狭危あらんそをのふそと推て試て船虫とのれいるごとく義理ある子と嫁とよりて慈愛の心あらば初より夫婦の為に尊大人に勧解もせず燃る薪に油を沃ぎて追遣しも日比を歴つけに媒人に呼びとられて雛衣とのを救ひとて彼水六ゆらもも任せざるべからず将に説諭に絶さる縁を結び留て恩義の枕を被らしに情由あらねば死るるもやや父子は只是天性に然れば他人の疑ひを容るに要る死とあれども其時宜に依るべきの某に任せ赤岩へ赴きて絆の虚実を探るべし夫三省は曾子の謹慎遠謀は逆臣を護るの墻なれば枉てこの議を容て主人の賢慮いかそやと密に問まて角太郎に沈吟して眼を開きて教諭宜に其由あり者なれども父の弟も

心剛にて客を愛するのみ也他郷の人と侮りて迭に怒りを引起さば禍災其迄に起らん狡しと雖も亦測りかたし所の義はいかと問へば現に芙蓉とも笑て弱に強を征せ柳の糸に雪折なし某彼人々礼儀をもて某に元を敬ふべし彼人々武をもて威さば某も亦勇をもせん餘に機に臨て変に応じ欲する所は足下の為に絆の虚実を揺るにあり之の労し

あふまと進むを離衣推禁めて淡薄き女子のさし出口のかねに増びれる赤岩の宿所に玉阪飛伴六月蓑園吾八黨東太佐兄八濃太郎などの一人當年の塾生侍り侮り過失あらんとの又角太郎も大飼の武備智術を陷むとあるねども身単にて危室に臨む寡なれば敵に対へ深念をもうとの所現に頭を掉て某全く微力を憑て心頻りに急るよりもさて虎穴に入らざるのいでに虎の子を獲ん愚意の決断已を沼ぞ疾まうんと遠く

袱色を掻含く。やをら背へ投被く。端引結び刀を引提く。ちや縁頰ゐ立
出く。草鞋索ゆく穿締ぶゐるド夫婦ハ禁めるく。皆端近く出く来ハ
切く今霄ハ休ひく。翌ゆ遅く弟りあふとも。遅きゆゑ。ゆゑを其ゆ聴ぶゐめ
るゑ々鐫くぐく牡ゐハむゆとゆゐを現ハ彼めむ。否めほうハゐむ。薄暮ゐ
るゑ路傍ゐる人ゐ求めく饑を凌ん二と毎已来旅馴くハ飢寒るゐ苦ゐ
ならぶ。ゐも。翌立ハ必久り糸冠ゐ吉左右を俟ゑ。さらば。とむろ足早ゐ赤岩を
投く出く色く。要時目送る角太郎。雛衣も只交遊の義信ゐ感ぶく忙
然と。折戸口ゆぶ立つく。離笆ゐ自生の玉蜀も懐陝き庭ゐら拂子ゐ似
る紫髯と共ゐ身の入る子ゆち達端緒縷び〜駒下駄を踏る覆〜そ。
わぶゆゆと夫ゐ心つけらまく。母屋へ出り新参の妻ハ勝るゐまぶ狎ぬ初々
しきと楽しきゆ。貌ゐゆゐハまくゆハまそ。

## 第六十三面

短刀を携来て縁連師家を訪ふ
衆兇と挑く信道武藝を顕ま

却説犬飼現八信道ハ犬村夫婦ゐ立別まく。頻りゐ路を急ぎ〜ゐ日も西ゐ
傾む比同郡真壁郡ゐる赤岩の荘ゐ来よゐり。途ゆく里人ゐ諮こる。赤岩一角
武遠ぶ宿所ハ方ゐて。ゆゑ〜と。ゆゑつ外ゐ立く。彼此を見久るゐ。この家ハ三方を板
垣ゐうち囲く。南面ゐ衡門ゆ。ひとゆり。ゆ赤松の枝長ゆ門を掩ふく。傘
蓋ゐ似こりけり。東のくゐ庭ゆゆゐ。ゆ。ゆ。ゆゆゐの樹立の倩きゆり短きゆり暮きゆを
紅ゐるゆりく。秋色の目ゐ爽然ゐる。樹傳ゐ鳥の声ゆこゐ。この庭のゆゑ。ゆゑ。武
藝の誉古所ゆゑとゆぶりく。撃合せん被声ゐ木刀の音ゆゑ。ゆゑ。或ハ笑ひ或ハ
罵る。動揺ゐゐ餘念ゐゐ。ゐ如く。現八ゆ莫仆ゐひるゐ〜を沼ざり〜ぶ菅笠を
翳ゐ。ゐ夕陽の影を遮りく。件の垣のゆとゐ立在ゐ。裡面ゐ人の出るを俟ゐ。

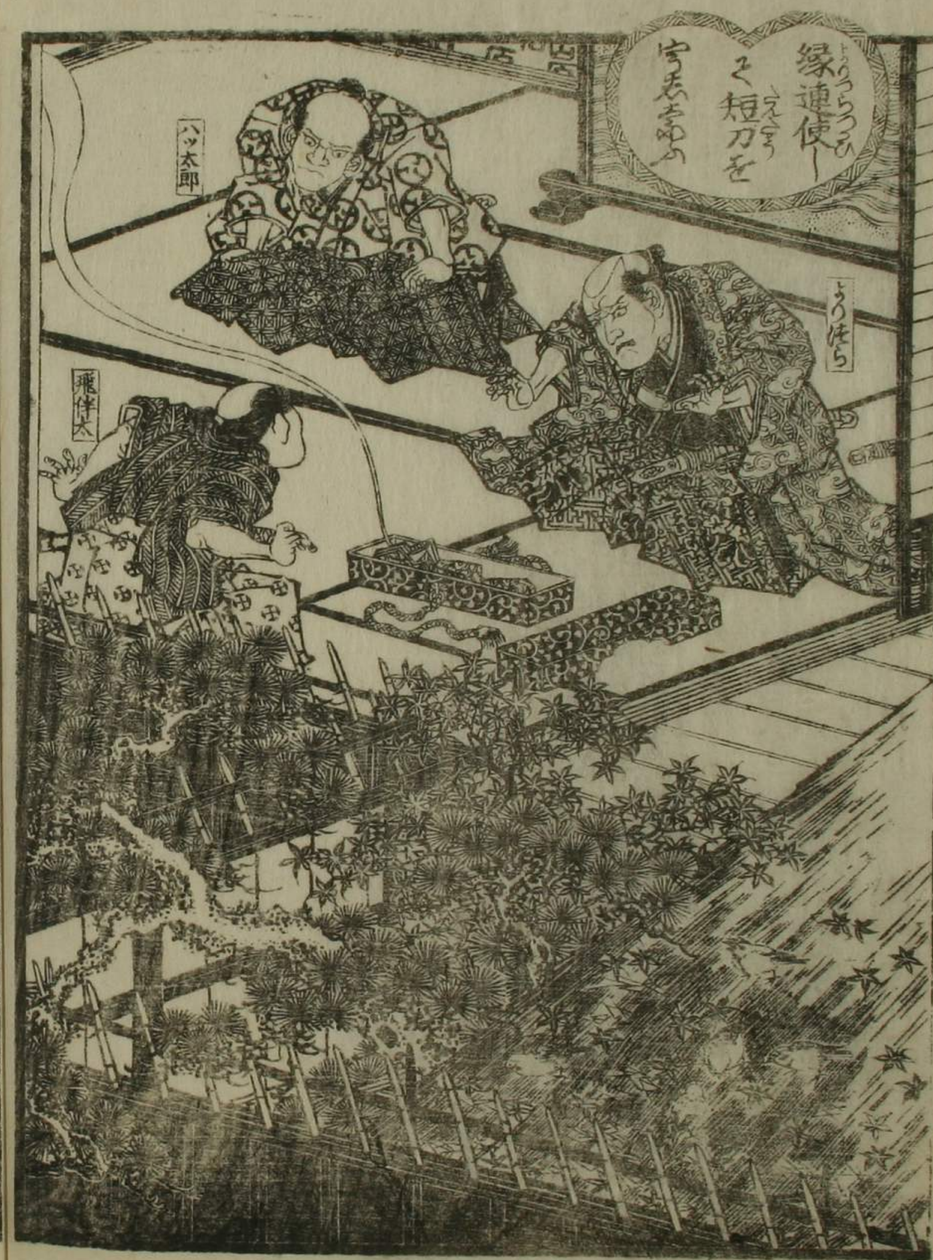
秋の日なれば短くて黄昏近くなりぬるに。浩処に一箇の武士の行装苛めしく。
純子の天鵞絨の縁とりたる野袴に長き朱鞘の両刀を跨へて紫縮緬の
三尺帯を端長に締做したる身長は五尺八九寸のやゝ逞しく眉は濃く眼圓に蒼
髯頤に元さ年齢は四十ばかり五十に遠からんと覚えたるが従者五六名を将て
細竹の杖ついて来たるが中に若黨とおぼしきのの長き蝙塗の笈を拿る
あり。奴隷は鎗を持るあり。鎧櫃を擔るあり。後方に一挺の行轎子を吊めたり
こゝに近つ来る。現八もこれを見れども只一角が奴輩なるに便り求めひろうん
と思ふ。外他夏もあれば深く心をとめざりしに件の武士は現八が立在るを怪し
げに幾回とかへり見つゝ。軈て赤岩角が衡門より進み入て供若黨に呼門
せしめ裡面よりも執達の若黨をやく出迎へて。引て客房へ請じけり。こゝに至りて
現八は件の武士を一角が客なりけりと悟るのみにも便著を得ざりき。抑今
赤岩一角が宿所へ詣来て覊旅の武士を邀るものゝ原るに是則別
人にあらず龍山逸東太縁連なれば件の縁連は今を距る三十七八年。寛正乙酉の
冬の比主命を矯て杉門は鄰き松原に。粟飯原首胤度主従を残害して
已が宿意を果せしのゝちその折嵐山の尺八と小笹落巣の両刀を盗賊に奪
と。畧ら三剣粟飯原が従者の撃て遍さ五一のがれ逃て赤塚へかへりしが縁連
進退谷りて罪を免るゝのなけれバその霄已が暇兵衛を岩槻なる古寺に捨
措ひとり忽地逐電して些の由縁を心當に下野なる宇都宮へ赴きしかども
武蔵と遠ければ仕官の望を遂に稱ひぞ同国赤岩の郷士なりける赤岩一角
武遠は素より武芸の達人にて弟子三百名あり且塾生も少からねば縁連は又
縁を討めて一角が家に赴き初一両年は塾若黨に在りけるを一角殊に技
萃て弟子頭にと立て名代とて彼此なる誓古の席へ遣しければ縁連は

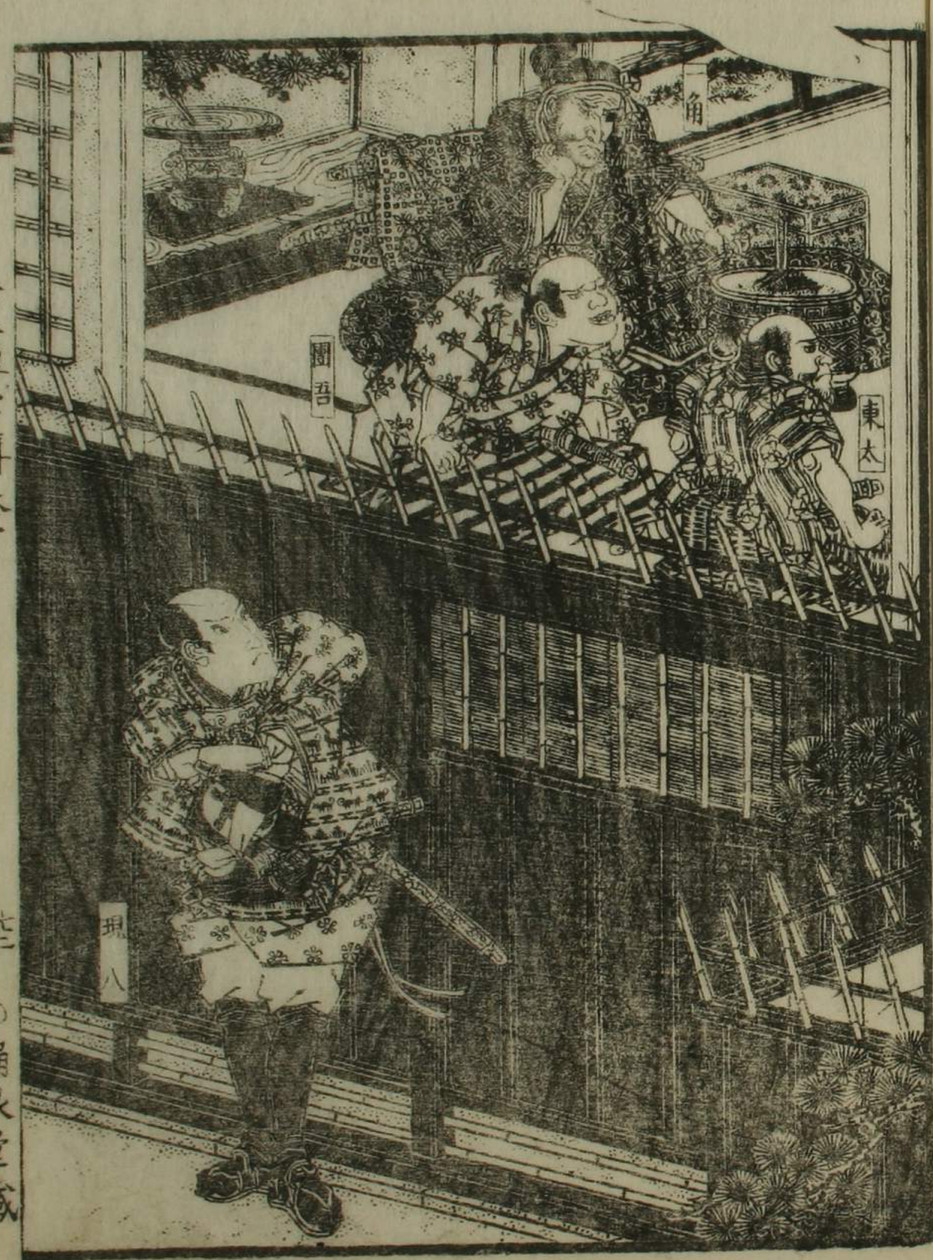
年々に武藝やう〻く上達しく侮るべからざりけり。有如之程に鎌倉山内家の内管領長尾判官景春越後上毛を伐靡けく獨立の企あり。これにより赤岩一角が武藝関左に雙なきとの世の風声を傳聞くあぐく使を遣しつ旦聘を篤くしく只顧渠を招きしに一角推辞く從はぬ。某ハ邊鄙の野人なり。世を我隨に送らんのみ素より官途の望なし。某が塾生に龍山逸東太縁連といふものあり。その大刀筋の精妙なる某に劣りはぬぞこのものをや石さぐへと真実こちく〻よう表ーふ亦後使節往還りしく絆やうやくに整ひけるに縁連ハ必ひうけあく越後の春日山に赴きく景春ぬぞ仕へる。扨も逸東太縁連がその師一角の意に惚ふく暇の禄を賜ふりしるに縁連その性奸悪ゆく同門のもの共の好きるものも反きるもの間多く時々く師に其きくその機を攬ること大くまるねば一角さの至を歎びくるが為にものとめ長尾家へ薦め挙くその身の代に赤岩

かくて又七八年を歴る程に景春ハ去歳の秋より上毛白井の城に在り。白井ハ原是長尾左衛門尉昌賢の居城なりに往る享徳年間より上管領定正の有とりしを去年景春これを獲く城普請をせし程に一日井を鑿て下口の短刀を得たりこれより景春ハ縁連を使とく赤岩許遣けり。閑話休題この日赤岩一角ハ矢傷の疼痛をものともせぬ痍ゆへ此の膏薬を布して白練に頭を纏ね三四重に裹ぬ。曲彔に倚を持しく塾生ぞが試撃をうち見て笑ひを催しる折ら執達の若黨走り来く上毛白井の城中より長尾殿の使に龍山氏の渡せられく對面を請れいそいで計ひまうさえやとのふを一角見久りく長尾家の使者なりとも逸東太ぞ呼ばけるハ。ものとぞ會ん疾さらと。いふに若黨ども為果く客房のうへ退りし程に塾生們ハ試撃を已て各々威儀を繕ひ〻師の左右ぬぞ侍りける。有然程に縁連ハ彼若黨に案内を

せられてそのその席に入りて遥に膝行頻首して仰ぎて一角をうかがへども。
やがて頭を擡げ。寒暖を述べ無異を祝せば。両箇の童扈従が茶を薦め果子を
羞す。形のごとく款待して。登時一角微笑して。珠丸が龍山生に。ごとく無異と云
いつつ。近属眼瘡の患ひあり。病床の對面いとも無礼なる所行なれども。懐愛
けなべ面會せりこれを侍る門生たちは。みな相識ぬべきうち。緩坐して相譚
あとに。縁連髀を進めて。そのかたへ目を傷らせあり。欽御容体を
いつぶやきて。痛みいなぶやと。問ふを一角仕へまゐ否さいふる瘡ゆへあらず。和殿
いふる比の来翰に去歳より主君に従ひて。白井に在城しあると欽越後と違ふ
路の程も遠ければいと愛ニ。ふるも猛く訪るる甚麼なる所要のあるやうん。
とのふ縁連さいふ這回の参向私要まあらぬ。即主君の使ひ仕へも及ぼせあるけん。
上毛の白井の城に去歳より寡君のもとに入りて用水の為に井を鑿られしに。

土中に一口の短刀あり。手揚てこれを見るに長さ八九寸五分木柄ぬて鞘も木
地に成いふ木天蓼をもて造れるものなれば故管領持氏朝臣の遺物なり。
村雨丸はあらんと。より尓丸ども彼君の滅亡ありしく既に幾の年を歴しるを
見べきこれを辨ずるのあり。且く僉議を凝らさるに所詮縁連が師匠と
仰ぐ一赤岩一角武遠に當世无二の武人ぬて且古刀の鑒定をもくるるもの
なるべし然らばこの短刀を縁連ぬ遣りて一角に真贋を問ぜば。玉石共に
分明あらんと。下野へ赴けとある。君命を稟りて夜を日に継て到著せり。御眼
疾を憚らず無心の至りなれども先生鑒定をくださるべ某も亦面を起を公私の
幸ひこのうへあらじと。綽詳に述訖りて携来る刀の柄を恭くさし寄せれば
一角仰てうち頷き木天蓼をもて柄とする。鞘とする短刀は物数奇なりと珍し
然るも亦疑ひあり。愚老が聞く傳聞る村雨丸の名刀とその長短同じからぬ。且村雨は


縁連使ひ
短刀を
ハッ太郎
ろうぼら
飛伴太


角
闘吾
東太郎
現八

うち振る毎ゆその刀尖より忽然と水氣飛散るのとぞいふなる。九の村雨と村雨あら
ぬ。この水氣をもそ證とまべ。こいふりの折のうちくて只一眼の鑒定ハいと覚束ゐ
呀為れども日の暮ぬ間ゆ見せん蓋ちひうちくて刀せ鬼といふ縁連おろ仏く
萠葱の紐解く再重箱の中より白氣立升りく隠々とてく一角ゞ坐邉ゆ靡
きく消失ーを縁連ハ心も得ぬ。そゞ俣蓋を掻取ゑ裏面ゆハ袋のこゆく。彼
短刀ハるうけり見いりゆ。そゞりゆ顔色忽地土のごく驚憂べて「ゐくゆーもゐく。
忙然ゑ平胸ゐうゆ。ゐう心を推鎮めく先生ゆ箱を御覧せよ不測のゐ
そゆゐれ某ゆ短刀を預り奉ゐく首途ーゐるゆ日よゐ轎子の内ゆ入ゑ或ゐ
若黨ゆ持ーゆど七奴隷の手ゆハ觸るゑ夜も亦枕ゆ引著く等閑ゆせ
るゆゐゑゆ目今蓋をひらきくゐれゞ袋のこゆく短刀ゆ既ゑ短刀紛失ゐ「ゑ」ハ
罪を得ん乞傳俟ゆ。疾退きく從者ゆを下穿鑿仕らん不敬を充ーゐゐ。と
言語急ーくその詰を告く退きゆんと「てけるを一角急ゆ推禁めく龍山生且
等ゆゐゆ短刀を從者ゆ竊畧ゐるのゆゐゆまで俟ひ来ることゆゐんや然ゐを
ゐ疑ゆく慇ゆ穿鑿せゞ労ーく功ゆゐのゐゐゐゐ身の過失を披露ゐる
嗚呼の所行ゆゐゐんぞゐんとゆゆ縁連有理と曰ゐそゆゐて立ゆゐゐ
ゆゐゞ又ゆゆくゐの身の罪を免るゞ願ゆハ先生教ゑゆゐゐゐと不樂ゆ
救ひを乞ふく已ゞーを一角さゐと嗟嘆ゆ堪ゞ愚老とゐも今さらゆせん術ゐ
ゐけれども和殿立久りてゐうゐんゆ師ゆゐ一角ハ眼病ゐうく床ゆゐり病著の
瘥り果ゐハ鑒定を仕らんゐの日よゐゐん短刀を留さゐゐう一角預り奉ゐゞ前
後相違ゐゞゐうゞとゐん答をゐうゞゆよゐゐの意ゆ任ーゆと返命を答ゑゆゐゞ且
當分の罪を免ゐんゐの間ゆ穿鑿せゞゆの短刀の出ざるんやさのゐか労ーゐひゐと
尉ゐゐんく縁連ハ綾ゆ色を直せども心ハゆまゞ安らゞゞ當下一角ゞ左右ゐる月蓑

團吾王坂飛伴太八當東太佐足灘太郎なとゝ共に塾生等倶に進み出
縁連に辭をかけて恙なきを祝し祝され或は又短刀の紛失を悔み且慰めて又且く
相譚ふ程にその日も既に暮しかば席上に燭を点じて童扈從が持運ぶ美酒珍膳の
よくある所狭まで按排べて縁連を管待せば一角が二男赤岩牙二郎後妻船
虫も出て來つ皆縁連に応對するそが中に船虫は初對面のことなれば達の口誼を
述盡して大酒醼にぞなりにける。主客の献酬置屡しく盃屢巡りし程牙二郎は
進み出縁連にうち對ひて龍山生は當家の高弟にてさむらふ人々も僉腹心の
輩なれば兄の如く弟の如く意中を盡して遊び更余なれども某なぞは邊鄙の
弱輩なるをもて江湖上の琦人をしらず越後上毛の国々にて武藝の達者もひ欲と
聞へぬ縁連頭を掉て否某もよくはしらねどヨヌくは皆是似ざるものゝみ老先生の小
指の頭にも向ふべきものゝはなぞ見えず思ひ出さる。鄕に遠来の武士とおぼしき年尚

幼き旅客がこゝの垣に身をよせて試撃の音を聴つゝ居りしが我師に渠は国
々を武者修行するものやらんと思へば立去るまでなる程が呼入させ各々の大刀を以て
見まらしやそれと與なることなきといふに飛伴太灘太郎東太團吾も雀躍
してかなしく。惜らくは時移りて日の暮れば立去りし欤とて外に出て一見
ましかどいはつて衆皆立んとするを一角ヤヤと呼禁めて噫喋々し四人まで揃ぞ
出ていなば團吾一人ぞあるもたりなし。その人今なほ立在せばともかくも説誘べし。
されどもそこは伴ひてよとてそれがゝ團吾はゆるりと勇立て外面をさして出にけり。
有然程に犬飼現八は赤岩が宿所の板垣のほとりに久しく立在て裡面より出る
人を候しに日は暮果ても便を得ざりければ後くと思ふものから且愁に遠慮しつゝ
得らず日の暮れば初更前後に門を扣きて宿をかりて後まで体よくなして一下宵を
此家に曉さばし。あらんかし一角が矢傷の浅深と船虫が言の虚実も定かに知らん

と尋思をめぐらす程に忽地に人あり。挑灯を引提げ。
角門より立出て。左見右見り現八がかたへ。進み近づき御邊は何處の
人ぞとゆく伴侶を俟ふ狀と同じく現八慇懃に否某は下總浪人犬飼現八
と呼るゝ獨行ゆく伴侶なり。當国に不知案内なれば宿をとり後を
いで大家に止宿をこんとおもふのみなら便宜を仮ざるべし冬ゝに立在さうといふよ
團吾は頭きたくそは痛しなるに近曾主人は眼疾ゆく日夜徒然に堪ざるべし
辯敵を討る折しもなるを通達せばうけ引るべしと疑ひなし。誘こゝを去て先に立
玄関のやうに將ゝ来つ一箇の奴隷を呼出ゝ。如此々と分付るべし奴隷は躰て
小盥に温湯汲ておもつ現八は足を洗ひ。かゝ團吾は現八を玄関の次の
間なる。編室に憩ふ。その身は遠より一角ホが身邊より至りゝ云云と。縁由を報ら
ける。是より先に縁連は東太。飛伴太。濃太郎ホと又盃を巡らしゝ團吾がかゝを

侯程に船虫は動もせざる角太郎夫婦のかゝをあしさまに噂せり。牙
三郎も亦相槌打ゝ。父の伝ゝ憚らぬと喋々ゝ罵りそう。浩処に外に
出る月蓑團吾がかゝ。現八が繹の趣筒様々と報ゝ衆皆齊一
を拍ゝ。繹ある成りぬとうち笑を一角急に推禁めゝ。ゆゝ出でゝは件の旅
客犬飼とは。現八とは下總浪人なりんは。二葢松山城主の弟子なりんは
ぎゝ二葢松は古人なりぬ縦渠死なずゝ今この團坐に入ゝ至とも絶ゝ
怕るゝ敵なれば。況その拙を受ゝんゝ末々の弟子をゝ介われども小敵へ
ゝ。若し侮らば過失あらんとおもふ。と微笑に衆皆一句に美伏ゝ。猛に
威儀を繕ふ程に團吾は又遽し。現八がかたに到ゝ只今なん頼の一條を
主人一角に達せ。病中なれども對面せんとおもふ。誘々とのひゝ。先に
立案内をゝ。圓居の席へ伴へば船虫はもとより避ゝ。屏風の背に躲ふ。

竊聞そうけ。有然程の現八を。席末に列りて。あるじに對ひ。今宵止宿の欵びを述しつゝ一角繞に肱をそなちて。遠遊の客人進ぜ。某近曾病痾に嬰つて。迎接に親まず不敬に用捨を。ゆるされ。弱冠に拙兒赤岩牙二郎と。又ゆゑある愚老が高弟。今は長尾の家臣なる龍山逸東太。縁連と又同席なる壮佼共を孰も皆塾生なり。彼は某甲。此は乙某。丙某なりと。一箇々々に告ぐれば。衆皆齊膝を進めて。不測の對面を祝ひける。且くして一角は牙二郎を見て。犬飼ねーを珍客なれども。不用意なれば。管待なし。食暴せー。有れども盃をまわらせようとの。牙二郎。おいらるゝ。犬飼ねー。弱年者の。特に礼あき。所行なれども。巡り来る小盃なり。異議なく受て過ぎへとのみ。羞を現はさず恭しく受戴きて。今宵の止宿を允さるゝ。旡是上幸福。諸君の圍坐に列りて。酒宴の餘興に與るるの昌果報。ありがとうございます。いざう貴意に

背んやとて。半受け飲盡して。その盃を返せば。これより。縁連に。皆相識の為ふとて。現八をのゝ敵手に。献ず酬つ時移るまで。武藝に誘る高笑ひ。酔よ乗じる。濃太郎。東太も共に進みよりて。犬飼ねーを何ぞの為にの地に遊歴なるかゆうんとのふを。牙二郎。うち消しつゝ。問ふまでもなく。犬飼ねーは武者修行。そもそもとは。縁連領きて。若先生の鑒定は。某も同案に。進止を見て。知りぬ。武邊に長ける人にて。虚稱なく。目を注ぎ。團吾飛伴太合大く。然る術藝の達人なり。一大刀教を受けて。欲す。此義は。いざ。そのゆゑ。現八驚ぎ。氣色なく。諸君の鑒定甚過ぎ。勿論某も。武藝を。嗜みなれども。武者修行なるものは。いかゞ。各位の敵なれば。そのゆゑ。食言に謝退なられ。是も非も。そもそも敵なれば。牙二郎。諸声立て。動揺懸りて。已ざりを。一角大く叱り

禁めそ。現八ふうち對ひ壮佼們ゞ大輕忽なるさてそ可笑く笑ひ出けり愚老が
病中ふかっざりせば一大刀試ミゆんふ。なのふふも似ぜ遺憾し。切そこの壮佼們ふ
教ゑゞ幸ひ。ちんと他事ゐくいふ。現八を推辞ふよ。ちくうち頷きそく武
藝を業ふせざるべ。現八両刀を帯ゐる甲斐ふかくまでよ宜べ脱る路のふふず。
誰々ゐりゐ教ゑとのふふ衆皆歡ひく。童扈従を呼近つけ。この一室ふ隣ゐる
稽古所ふ大きゐる。蠟燭點ゐ灯さ。准備立地ふ整ひけるべ飛伴太八逸速く
稽古所の柱ふ掛ゐる木刀ヨマくとり卸し。現八がやとうふ。そ来ふ孰ゐとも擇ミ
ゑとのふふ現八合笑くゆと短きを取ゐ。飛伴太八長きを拿ゐ。間の衫戸を
開放ち。絶の中ふ跳入るゞ現八ゐ推辭きそく件の男と對ひ。かくて角を
初とく衆皆其方ふうち向べこの時ゞゐ竊聞ゐる。船虫ゐ物の隙より。
勝負ふとゐる程ふ且く飛伴太八。忽地ヤッと声を發ゐ。撃んとゐるを

現八ゐ。両三刀受拄ゐ。逡巡をしく。けるべ飛伴太沼ゐと踏八ゐ。ゐゞび撃んと
ゐる処を現八ゐ。ゐく引外しく左の肩尖丁と撃ふ。ゐゐも尖鋭き大刀風ふ飛伴太八
苦と叫ゐく矢庭ふ仰反り倒るゐ。現八ゐ今この敵手の眉間を撃べ撃べゐ。
倘撃殺せゐのやとゐく只ゐの肩を撃しゐり。飛伴太既ふ打倒されく。ゐゐふ刃を
起せばゐ立代ゐる八黨東太参るぞと呼び。ゐく赤樫の木刀を閃くゐる勢ひの。
猛きを現八ゐのとゐ。ゐ六七合撃合しゐヲッと嘯く右の拳を痿痺るゐ。
撃しゐ東太八持ゐる木刀を三間ばり反飛ばゐく怯むを現八衝とゐ。左手ふ
襟上掴ゐ。力を究めく投ゐける勇士の手煉目覚しく東太八腎を壁ら。て霎
時八起も沼ぞりけり。この者共ゐ再度の不覚ふ弁一慓立濺太郎團吾も倶ふ作法を
紊しく。両人右より左ゐ。只陽爀の閃くごく。透間もなく撃木刀を現八ゐ右ふ
拄左ふ拂ゐく寄せつけぜ。三人の被声。撃刀音八冬の深山ふ杣木樵る斧鉞の響ふ

牙二郎
現八
五兄弟
一角
蘭吾
ひぞる太

現八
東太
ハツ太郎

異なるぞ勝員も果てと刀る程に現八を足を蹴て圍吾が膳を蹴と蹴て返を刀ゐ潑太郎が腰骸拂ゐ早抜ゐ両人齊に筋斗まき足空ざまゐ輾轉び四撰の鑿を逆さゐ植並に似たりけり既ゐ四箇の塾生ホハ皆直輸ゐ負しゐ難こる龍山縁連遠ゐ犬飼生頻ゐ勝ゐ乗ゐ及びて一ゐ及ども負て恥辱を遺さえより撃殺さるも勇士の本意ゑ誘具剣ゆく勝員せんその木刀ハ措ゐと言語急に呼びけく野袴の稜結ミ刀を引提て立向へば現八莞爾とうち笑て現勇に死所望の器械その義ハ貴意ゐ任に某ハ恨ゐ死人を害る心ゐ毛ゐ木刀こそ相応に誘撃ゐと驕ゐ膽勇憎さゐ悪に縁連ハ応ゐ沿せず身を斜りて捧四五寸抜蒐る。臂を駐に巻法の秘決沈て必ずび引抜く刀を左へ拂ゐ引組て。縁連も亦覚ゐ。臂力ハ剛く骨逞に身長六尺ゐ近けば。拗んと刀を捨て。岌ゐ被りて角へども現八を席撃組撃捕物の秘術を極に。坂東無雙の手煖煉ゐ且ハ組て仆ゐ些ゐ撓ず推せども突けども。不爭の受身ゐ剛柔進退法ゐ稱ひて。挑みゐ上半晌ぞろ。能ず敵を疲労ゐ透を窺ひやと声かけて。朽たる柱を抜く如く。左へ撞と操伏せて。登に蒐て動き出ず。坐席のうちを見かへりて。諸君子勝員ゐ見えつるんとのたまひて膝を退けて引起さえんとする程ゐ牙二郎ハ數人の不覚を見る目不樂に歯を切て。刀を引提身を起に。ゐ現八を撃んと進むを一角ハ声高ゐ牙二郎等と呼禁めて。身邊へ引著けぬ。そび立ず。その間ゐ現八を縁連を扶起に。些ゐも誇る氣色なく。龍山ゐ。ゐんゐの中の何処も痛こはむぞ鄙語ゐの怪我の功名大く無礼を仕ゐ且く休ひ給へとのたまへば。縁連答るよ。只憤ゐ胸塞りて圓ゐる目を睜るのミ遺る刃をとり揚て。そゐ仆難ゐ歟ども。治らぬ怒を忍びて目礼に共侶ゐ舊の席ゐ著に。現八を潑太郎

飛伴太東太團五郎ら對ひて諸君の懇望辞しがたき由を宣へ大刀筋を受へ〻ふ殆感心仕りぬ勝負八時に依るものなれば必仇意を含まるゝといふに四人八頷くのみ顔を背け擂尻を応ずるのみ登時あるゝ上角八袖を外へて現八を上座に請薦め扇を披きて扇立々々つゝ言語を改めて優〻言犬飼ぬ〻いへの八幡太郎九郎判官義家ぞ其右に出べき某病中なれ

ざりせば又ん敵なるべきに幸ひなるかな巡て已が力を料らず負腹を立のみ皆その器量の窄き所以ぞ第子们ゆゑとの年来よく做ふ事八稿に遵へて恨を含むめ〻あるべきもいかゞ改めて又一献酌ん僮共て銚子を替よといふに衆皆怒を歛て又盃を巡らせぬ物の蔭なる船虫八歎息あり退きけ事竟現八ぞ武藝を顕て又甚麼なる話説あるそ次の巻に解分るを聴ねかし

里見八犬傳第七輯巻之一終